

〈研究・調査報告〉

医療福祉系専門職養成校における 加齢性難聴に関する教育の現状 —国家試験出題基準と教科書の記載を手がかりとして—

佐野 智子 ・ 小川 智子
森田 恵子 ・ 長田 久雄

【要旨】

本研究の目的は、医療福祉系専門職養成校における加齢性難聴に関する教育の現状を、各資格の出題基準と教科書から明らかにすることである。理学療法士・作業療法士、社会福祉士・精神保健福祉士、介護福祉士、看護師資格の国家試験出題基準とテキストから高齢期の聴覚障害と高齢難聴者とのコミュニケーションに関連する項目を抜き出し、養成校で行われている加齢性難聴や難聴高齢者とのコミュニケーションに関する教育の現状を検討した。94冊の教科書のうち、該当する項目があったのは24冊であった。国家試験の出題範囲と24冊の教科書を分析した結果、これらの資格に共通した項目は、聞こえの仕組みや難聴の種類であった。一方、高齢者の生活を援助・ケアする介護福祉士と看護師では、難聴高齢者とのコミュニケーションに関する項目が含まれていたが、その他の資格では含まれていなかった。出題基準と教科書の結果は一致しており、教科書が出題範囲をよく反映していたことが確認できた。実際の教育がどのように行われているかは、今後の課題として残された。

キーワード：加齢性難聴、コミュニケーション、医療福祉系専門職教育、テキスト、国家試験出題基準

1. はじめに

日本の65歳以上人口は、3,625万人を超え（総務省統計局，2024）、高齢化率は29.3%と過去最高を示している。加齢に伴い難聴者の割合は上昇し、75歳以上では約7割が難聴であると推計されていることや（内田ら，2012）、2025年には団塊の世代がすべて後期高齢者となることから、今後、難聴高齢者の急増が予想される。また、高齢期には医療機関への受診が増えることから、医療福祉専門職が、難聴高齢者と接する機会は増加すると考えられる。しかし、看護師は業務の種別に係わらず、高齢難聴患者に対する看護の困難さを抱えている（森田，2018）。一般に難聴に関する知識は十分ではなく、難聴者とのコミュニケーションに困難

を抱えていることは、全国自治体職員を対象とした調査（佐野ら，2020；Sano et al., 2024）でも明らかになっていることから、他の医療福祉専門職も同様の状態であると考えられる。

医療福祉系専門職を目指す学生も困難を抱えている。例えば、山本ら（2019）によれば、患者とのコミュニケーションに困難が「ある」「どちらかといえばある」と回答した看護学生は66.7%存在した。看護学生が患者とのコミュニケーションで感じる困難に関する高野（2024）の文献レビューによれば、看護学生が感じた困難は、老年看護学の領域が最も多く、「難聴の老年者とのコミュニケーションが難しい」が「認知症の高齢者とのコミュニケーションが難しい」と同数で最も多かった。この「かかわりの困難さ」は他の医療専門職を目指す学生にも内在する可能性が指摘されている（清水，2007）。藤澤ら（2017）によれば、医療系学生は臨床実習において教員やスタッフが想像する以上のストレスを感じており、きめ細やかなサポートが必要とある。したがって、難聴高齢者とのコミュニケーションに関しては、実習ではじめて体験しながら学ぶよりも、事前に必要な知識やコミュニケーションの工夫を体系的に学ぶことが望ましい。それにより実習生および難聴高齢患者のストレスを低減することが可能である。しかし、各専門職養成校において、難聴理解と対応の質向上のための学習が含まれているかは不明である。

そこで本研究では、現状把握のため、医療福祉専門職の養成校では、加齢性難聴や難聴高齢者とのコミュニケーションがどの程度扱われているかを、各資格の国家試験出題基準と教科書を手掛かりとして分析する。

2. 目的と方法

2.1 本研究の目的

本研究の目的は、医療福祉系養成校における加齢性難聴に関する教育の現状を、各資格の出題基準と教科書から明らかにすることである。

2.2 方法

2.2.1 分析対象

分析対象は、理学療法士・作業療法士、社会福祉士・精神保健福祉士、介護福祉士、看護師の国家試験出題基準と教育で用いられる教科書である。理学療法士・作業療法士に関しては、医学書院の「標準理学療法学シリーズ」14冊、「標準理学療法学・作業療法学シリーズ」11冊、メジカルビュー社の「Crosslink 理学療法学テキスト」12冊、金原出版の「PT・OTのための臨床技能とOSCE」2冊の計39冊、社会福祉士・精神保健福祉士および介護福祉士に関しては、中央法規出版の「最新社会福祉養成講座」「精神保健福祉養成講座」の29冊、「介護福祉養成講座」15冊を確認した。看護師に関しては、加齢性難聴は看護学教育において、老年看護学で教授されることが多いため、「老年看護学」のテキスト6社11冊を対象とした。

2.2.2 分析方法

各国家資格の出題基準で「加齢性難聴」「聴覚障害」に関連する項目を検索し、一覧表にまとめる。また、各教科書に「加齢性難聴／老人性難聴」「聴覚障害」「コミュニケーション」に関する記述を確認し、それを一覧表に抜き出し、扱われている内容を分析する。

3. 結果と考察

3.1 出題基準について

各国家資格の出題基準で「加齢性難聴」「老人性難聴」で検索をしたが、いずれの出題基準にも含まれていなかった。「聴覚障害」「聴覚」に関連する科目を抜き出した(表1)。理学療法士(PT)・作業療法士(OT)、社会福祉士(SW)・精神保健福祉士(PSW)では、障害の概要に関しては若干の記述はあるものの聴覚障害者とのコミュニケーションに関する記述は、出題範囲からは読み取れなかった。一方、介護福祉士と看護師に関しては、聴覚障害の概要のほかに高齢者の特性に応じたコミュニケーションの項目があった。介護福祉士も看護師も難聴高齢者の日常生活をケアする役割があるためと考えられ、各資格の特徴が表れていた。

表1 高齢期の聴覚障害に関連する各国家資格の出題範囲

資格	分野	大項目	中項目	小項目
PT・OT	I 人体の構造と機能及び心身の発達	2 生理学	D 感覚、認知	d 聴覚、平衡覚
	II 疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	4 リハビリテーション医学 9 中枢神経の障害と臨床医学	C 機能障害の評価とリハビリテーション E 栄養、薬剤、その他の治療	l 聴覚障害 g 視覚・聴覚障害
SW・PSW	① 医学概論	4 疾病と障害の成り立ち及び回復過程	3) 障害の概要	聴覚障害
	⑧ 障害者福祉	1 障害概念と特性	2) 障害者の定義と特性	聴覚障害
介護福祉士	コミュニケーション技術	3 障害の特性に応じたコミュニケーション	1) 障害の特性に応じたコミュニケーションの実際	聴覚・言語障害のある人とのコミュニケーション
	発達と老化の理解	1 人間の成長と発達の基礎的理解 2 老化に伴うことごとからだの変化と生活	3) 老年期の基礎的理解 3) 高齢者に多い症状・疾患の特徴と生活上の留意点	老化の特徴 高齢者に多い疾患
看護師	人体の構造と機能	5 感覚器系	C 聴覚	外耳・中耳・内耳の構造、音の伝播、聴力
	疾病の成り立ちと回復の促進	12 神経機能	C 感覚器系の疾患の病態と診断・治療	聴覚障害
	成人看護学	18 感覚機能障害のある患者の看護	A 原因と障害の程度のアセスメントと看護	聴覚障害
	老年看護学	3 高齢者の健康	B 老年期における身体機能の変化	
5 高齢者の生活を支える看護		A 高齢者のコミュニケーションの特徴と援助		高齢者のコミュニケーションの特徴、身体機能・認知機能・個性に応じたコミュニケーションの方法

3.2 教科書分析結果

全94冊の教科書を確認し、「高齢期の難聴」および「難聴高齢者とのコミュニケーション」に関連する記述があったものは24冊だった。それぞれの関連項目を表にまとめた(表2)。

理学療法士・作業療法士(PT・OT)については、『生理学』のテキストで、耳の構造と機能、難聴の種類について説明していた。『高齢者理学療法学』『老年学』では、高齢者の感覚機能の加齢変化として「老人性難聴」による聴力の低下について10行前後で説明されていた。『高齢者理学療法学』では、難聴は認知症の修正可能な危険因子であるとの説明もあった。『老年学』では、補聴器や会話での留意点、人工内耳などに関する記述もあった。『日常生活活動学・生活環境学』では、聴覚障害者用機器として、補聴器、受話器タイプの支援機器、アプリの紹介があった。『コミュニケーションと介助・検査測定編』では、難聴がある患者に対しては、「声量を大きく」「声のトーンとスピードを抑える」「マスクの使用を控える」などのコミュニケーションのコツが述べられていた。

社会福祉士・精神保健福祉士(SW・PSW)に関しては、全29冊中『医学概論』『障害者福祉』『高齢者福祉』の3冊のみに若干の記述があった(表2)。『医学概論』では、耳鼻咽喉疾患に関する8行ほどの概略に続き、聴覚障害の分類と説明があり、そのひとつに「老人性難聴」があった。『障害者福祉』では、聴覚障害についての二次的な問題や聴覚障害者福祉の歴史について説明があり、福祉資格の特徴が表れていた。『高齢者福祉』では、加齢変化として聴覚の変化について2行程度の説明があるのみであった。難聴者とのコミュニケーションに関しては、全く記載がなかった。

介護福祉士に関しては、15冊中5冊、『こころとからだのしくみ』『発達と老化の理解』『コミュニケーション技術』『生活支援技術Ⅲ』『障害の理解』で記述があった。PT/OT、SW・PSWのテキストでは、数行から多くても1ページ半程度であったが、介護福祉士のこれらのテキストは7ページに及ぶ説明もあり、記述量は多かった。さらに、難聴高齢者の支援に関して、事例を用いて説明しているテキストが2冊あった。いずれの教科書にも述べられていたことは、聞こえの仕組みと聴覚障害の分類であった。『発達と老化の理解』で老化に伴う聴力変化とそれによる語音明瞭度の低下、聞こえにくい場面、コミュニケーションの工夫が述べられている。『コミュニケーション技術』『生活支援技術Ⅲ』では、コミュニケーションの手段として、口話、読話、手話、指文字、筆談、補聴器などについて記述があった。また、この2冊に事例が載っており、より具体的に学ぶことができる。『コミュニケーション技術』では、聴覚障害者のための環境調整として、テレビを消す、窓を閉めるなどの具体的な対策が図示されているほか、聴覚障害者への伝え方のポイントが箇条書きにしてある。『生活支援技術Ⅲ』では、介護者が注意すべき補聴器の取り扱いの留意点についても具体的に示しているほか、介護福祉職も聴覚障害者理解のために、補聴器を実際につけて試してみることも勧めている。さらに家族へのかかわりについても、聴覚障害を理解できるよう支援するといった記述もあった。

表2 教科書の分析結果

No.	資格	分類	本のタイトル	編者	出版年	出版社	章	ページ	記述まとめ	記述量
1	PT	Crosslink 学療法テキスト スト	高齢者理学療法学	編集 池添 冬井	2020	メジカルビュー社	1章総論/1高齢者の特徴 ①1高齢者の基礎的理解 表1 ②加齢に伴う生理機能の変化 ③3章 高齢者に対する理学療法 6 高齢者の認知症予防 1 認知症の危険因子	① 6 ②81 ③296	①「表1 高齢者の身体機能低下」の一覧表の中で、「感覚系」に「聴力低下(老人性難聴)」の記述あり。 ②聴覚の加齢変化(可聴範囲が狭くなる、高音域から聴力低下)と聴覚障害が認知機能の低下にも関与していることを示す。 ③認知症の修正可能な危険因子として、最後に10行程度「難聴」の記述あり。	①単語のみ ②8行 ③10行
2	PT	PT 標準理学療法学・作業療法学 専門分野	日常生活活動学・生活薬理学 第6版	編集 鶴見 陸正 / 隆島 研吾	2021	医学書院	第2章 生活を支える福祉・リハビリテーション関連用具	299	聴覚障害者用機器(補聴器、受話器タイプの支援機器、アプリア)の紹介。	13行
3	PT/OT	PT・OT 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野	生理学 第5版	監修 奈良 勲 / 倉 矩子	2019	医学書院	第6章: 感覚 D 特殊感覚 2 聴覚と平衡感覚	79-82	耳の構造と働き及び音に関する記述、難聴の種類(伝音、感音、老人性難聴)、耳の図。	34行 8行
4	PT/OT	PT・OT 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野	老年学 第5版	監修 奈良 勲 / 倉 矩子	2020	医学書院	①第2章: 加齢に伴う変化 B 感覚機能の加齢変化 2 聴覚 ②第4章 加齢に伴う変化: 精神心理面 A 老化による認知機能の変化 2 聴覚機能 ③第25章 耳鼻咽喉疾患 B 感覚器と加齢 1 聴覚と加齢 ④D 高齢者の耳鼻咽喉疾患 1 老人性難聴と高齢者の難聴 第25章	①16 ②34 ③283-284 ④285-286	①感覚機能の加齢変化のところで「老人性難聴」の発生機序について説明。 ②第4章の加齢に伴う変化: 精神心理面のところで、聴力低下の特徴と、コミュニケーション上の困難及び危険回避の低下になりやすい点を説明。 ③聴力低下の傾向、男女差、聴力低下の要因(騒音暴露、薬物、全身拘括障害疾患、加齢変化)、語音聴力の低下。 ④D 高齢者の耳鼻咽喉疾患 1 老人性難聴と高齢者の難聴で、加齢性難聴の説明のほかに、補聴器や会話での留意点、人工内耳に関する記述。	①12行 ②18行 ③16行 ④41行
5	PT/OT	PT・OT 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野	PT・OTのための臨床技能とOSCE コミュニケーションと介助・検査測定編 第2版補訂版	監修 才藤 栄一	2020	金原出版	3 コミュニケーション技法	37-38	臨床のコツとして、難聴がある患者に対しては、声量を大きくし、声のトーンと話すスピードを抑える。また、一文を短くしたり、ジェスチャーを交えたりすることで内容が伝わりやすくなる。聞こえやすい側があれば、そちら側に移動して話をするとうい。	3行
6	SW/PSW	社会福祉士養成講座/精神保健福祉士養成講座共通科目	医学概論	一般社団法人ソーシャルワーク教育学校連盟編	2021	中央法規	第6章 疾病と障害およびその予防・治療 ① 第12節 耳鼻咽喉疾患、聴覚障害、平衡機能障害に約3ページにわたって聴覚障害に関連する記述あり。 ② 第17節 高齢者に多い疾患 難聴の記述のみあり	①169-176 ②203	①耳鼻咽喉疾患の概要を説明したうえで、聴覚障害の分類(部位による分類: 伝音難聴、感音難聴、混合難聴、発症時期による分類: 先天性、後天性)について解説。聴覚障害の症状として、耳鳴や補聴器があることも述べている。障害の程度により身体障害者手帳の給付対象となり、補聴器の支給が受けられることも述べている。 老人性難聴に関して、内耳の加齢変化で、感音難聴で高音中心の難聴、左右両方、語音明瞭度の低下、耳鳴を伴うなどの特徴が記述されている。補聴器装用を考慮し、耳鼻科受診が望ましいこと、難聴は認知症の危険因子のひとつとも説明されている。コミュニケーションについては、大声で話すのではなく、ゆっくりに、はっきりと話すといった工夫が紹介されている。 ②服用状態の説明の図に「難聴」の表記あり。難聴に関する説明は特になし。	①聴覚障害全般について 53行 老人性難聴について 12行

No.	資格	分類	本のタイトル	編者	出版年	出版社	章	ページ	記述まとめ	記述量
7	SW/PSW	社会福祉士養成講座/精神保健福祉士養成講座共通科目	障害者福祉	一般社団法人ソーシャルワーク教育学校連盟編	2021	中央法規	①第1章 障害概念と特性 ②第2章 身体障害者の特性と支援内容 ③第3章 障害者福祉の歴史 3 障害者処遇の変遷 2 聴覚障害者 3 戦前・戦中の障害者の処遇 2 聴覚障害者	①6-7 ②52-53	①聴覚障害者に関する分類（伝音性難聴と感音性難聴）の説明と二枚的障害の説明。先天性や早期の聴覚障害の場合、言語獲得の課題があり、その手段には口語、手話、残存聴力を用いた（補聴器・人工内耳）が解説されている。補聴器を使用しても効果により聞こえが悪くなるため、周囲のサポートが必要などを述べている。 ②聴覚障害者は周囲からの理解が不足しがちであり、誤解をされることや、災害時に情報が伝わらなくなることや、高齢期の聴覚について触れられている。 ③聴覚障害者福祉の歴史について述べている。	①聴覚障害者について12行 ②聴覚障害者福祉の歴史について25行
8	SW	社会福祉士養成講座専門科目	高齢者福祉	一般社団法人ソーシャルワーク教育学校連盟編	2021	中央法規	第1章 高齢者と少子高齢社会 高齢者の定義と特性	7	表1-2 高齢者の身体器官の加齢現象・機能的変化に伴う疾患に聴覚器系の障害のところで、血液循環の障害により、高音域が聞き取りにくいと説明あり。	2行
9	介護福祉士	介護福祉士養成講座	高齢者福祉 くみ	介護福祉士養成講座編集委員会	2019	中央法規	①第2章 からだのしくみを理解する 第1節 平衡感覚器 ②第4章 みだたけに関連したところとからだのしくみ 第4章 老化にもなることとからだの変化と生活 ①第1節 老化にもなる身体的な変化 ②第2節 老化にもなる心理的な変化と生活 ③第5章 高齢者と健康 に多い疾患・症状と生活上の留意点 2 耳の疾患	①48 ②118-119	①平衡感覚器の説明で、平衡感覚と聴覚に関して、外耳から内耳までの構造と機能についてを簡潔に説明している。 ②耳の構造と機能について、外耳、中耳、内耳、音の伝わり方に分けて説明している。	①13行 ②20行
10	介護福祉士	介護福祉士養成講座	発達と老化の理解	介護福祉士養成講座編集委員会	2019	中央法規	①第1節 老化にもなることとからだの変化と生活 ②第2節 老化にもなる心理的な変化と生活 ③第5章 高齢者と健康 に多い疾患・症状と生活上の留意点 2 耳の疾患	①122-124 ②144-145 ③225-226	①加齢に伴う聴力変化を「聴覚系の変化」及び「加齢による聴力レベルの変化」の図を用いて説明。聞こえの特徴や音源定位が困難になることを説明している。 また、伝音難聴は補聴器の使用により聞こえやすくなることと記述。 ②高齢者の難聴は感音性が多いこと、語音明瞭度の低下や補充現象についても説明。雑音が多いところでの聞こえにくさを述べ、聞き取れないことがあることや誤解する場面があることを説明。難聴の高齢者とのコミュニケーション法として、大きく発音する声よりもはっきりと話すことが有効と述べている。また、大きな声で話をする一方で、高齢者の自尊心が損なわれることもあると解説。 ③加齢性難聴の原因、症状について説明。高音域から徐々に聞こえにくくなるので、本人は気づかないことがあり、耳鳴りや会話の途中で聞き返したりが徴候としてあげられる。周囲の環境を調整し、気持ちの負担を軽減する配慮が必要。耳鳴りには薬物療法がある。	①15行 ②28行 ③26行
11	介護福祉士	介護福祉士養成講座	コミュニケーション技術	介護福祉士養成講座編集委員会	2019	中央法規	第3章 対象者の特性に応じたコミュニケーション 2 難聴・聴覚障害のある人への支援	85-91	①聴覚障害者の分類（伝音性、混合性、先天性、後天性）とそれぞれの特徴。および加齢性難聴の4つの特徴（高い音が聞こえにくく、同側性、方向弁別困難、補充現象）の解説。日常生活コミュニケーションの支援として、音が聞こえないことによる支障（風の音虫の声なども聞こえず、孤独感や喪失感についても述べている）、高い音が聞こえないことによる支障として、電子レンジや携帯のアラーム音などの生活音が聞こえないことを説明。女性や子どもの声が聞き取りにくく、介護者が「高い声」で話しかけると、聞き取りにくいと記述されている。続いて、音の方向がわからなくなることによって、カカアルーバーブリー現象が苦手。 ②聴覚障害のある人に対するコミュニケーション技術の基本的対応として、手話や口話、筆談、補聴器、コミュニケーション環境、伝え方のポイントについて解説している。 ③コミュニケーション環境の重要性を述べ、雑音を消すことを勧めている。伝え方のポイントを表で示し解説している。 ④最後に事例について解説し、聴覚障害のある人が入所した場合、補聴器を確認すること、使用前に耳鼻科医、補聴器専門医、言語聴覚士などの専門家に調整をしてもらうことや、認知機能の低下した聴覚高齢者への対応についても解説。	合計7ページ ①聴覚障害の特徴と生活への支障3ページ(50行) ②聴覚障害のある人に対するコミュニケーション技術3ページ(51行) ③事例を通してコミュニケーション環境を整える支援を考える1.2ページ(34行)

No.	資格	分類	本のタイトル	編者	出版年	出版社	章	ページ	記述まとめ	記述量
12	介護福祉士 成講座	介護福祉士養成講座	生活支援技術Ⅲ	介護福祉士養成講座 編集委員会	2019	中央法規	第2章 障害に応じた生活支援技術Ⅰ 第3節 聴覚・言語障害に応じた介護	46-55	①聞こえの仕組みと聴覚の種類（伝音性、感音性、混合性）の説明、音の大きさの説明、聴覚障害者の数と分類（ろう者、中途失聴者、聴覚者、もうろう者）、補聴器の使用上の留意点（1補聴器の電池が切れていないか、2耳栓がびつたり耳に入っているか、3水にぬれていないかを確認）、補聴器の管理で耳鼻咽喉科の医師や補聴器専門店との連携の必要性、補聴器使用者へは、大きな声や音を出さないなどの記述もある。また、介護福祉職も聴覚障害者への理解のために、補聴器を実際につけて試してみようことを勧めている。 ②生活上の困りごとの節では、主なコミュニケーション手段（口話、読話、手話、指文字、筆談、空書、要約筆記）について説明がある。 ③聴覚の聴覚として、話しかけるときの留意点（ごく自然に、特別ゆつとく語り話さない。繰り返すか、短くわかりやすい言葉に変えて話す。話し手が光に向かう位置に立ち、口の動きや表情が相手によく見えるように、聴者の人が同時に話をしている場では、発音者が手をあげて一人ずつ順に発言）。 ④家族へのかわりとして、聴覚障害者に対する理解を支援する。聴覚障害者は情報が入りにくく、状況がわからず疎外感を感じることが多い。同じ障害がある仲間と交流の機会を持つことも大事であることを家庭に理解してもらう。補聴器についても、補聴器の調整に時間がかかることなど、家族へのアドバイスを含め支援する。 補聴器について、補聴器の調整に時間がかかることなど、福祉制度や情報機器等の利用について、自治体に確認することをお勧めしている。情報機器の一覧表あり。 最後に、事例で、本人の片腿の確認、ホームヘルパーの対応、専門職との連携について記述あり。	合計10ページ ① 4ページ ② 1.5ページ ③ 1.2ページ (40行) ④ 1.4ページ ⑤ 事例1.7ページ
13	介護福祉士 成講座	障害者の理解	障害者の理解	介護福祉士養成講座 編集委員会	2019	中央法規	第2章 障害者の基礎的理解と特性に応じた支援Ⅰ 第4節 聴覚・言語障害	74-79	1. 聴覚障害の分類（程度、部位、発症時期による分類）。 2. 障害の特性の理解（成長発達過程における理解、コミュニケーションの制限による生活上の困難）。 3. 障害の特性に応じた支援として、コミュニケーションの手段（補聴器、人工内耳、筆談、手話、読話、口話）、障害福祉制度による社会的資源（身体障害者手帳の交付、福祉用具の活用、合理的配慮）。 ①聴覚の構造と変化（純音聴力・語音弁別能・老人性聴覚）、アセスメント方法※生理学変化と聴覚の程度分類の図を含む。 ②「高齢者におけるコミュニケーション障害のアセスメント」の一部として、老人性聴覚の原因と症状、アセスメント方法を掲載。 ③「聴覚や視力障害をもつ高齢者とのコミュニケーションの方法」の一部として、聴覚のある高齢者に共通する留意点、補聴器を応用している高齢者の場合、視覚聴覚二重障害の高齢者への対応について解説。その中で「看護師も補聴器について最低限の知識をもち、補聴器をもっている高齢者については、できるだけ使用するようにすすめる」こと、補聴器を所持している高齢者、必要に応じて耳鼻科受診をすすめることを述べている。 補聴器について写真つきで紹介。	6ページ
14	看護	系統別看護学 講座 専門分野Ⅱ	老年看護学	著者代表 北川 公子	2024	医学書院	①第4章 高齢者のヘルスケアアセスメント ②第5章 高齢者の生活機能を整える看護 ③第5章 高齢者の生活機能を整える看護	①99-101 ②201-202 ③208-210	①2ページ (56行) ②13行 ③33行	

No.	資格	分類	本のタイトル	編者	出版年	出版社	章	ページ	記述まとめ	記述量
15	看護	系統別看護学 講座 専門分野 II	老年看護学 病態・疾患論 第5版	鳥羽 研二、佐々木 英忠、荒井 啓行、 秋下 雅弘、海老原 寛、角 保徳	2018	医学書院	第4章 高齢者の疾患の特徴 L 感覚器 の疾患 ⑤聴覚	254-256	伝音聴覚と感音聴覚、老人性聴覚、慢性中耳炎、老人性聴覚の治療については聴覚者の聞こえ方の特徴と補聴器について概要が説明されている。 看護上の注意とコミュニケーションについて、「ふつうの声で、表情や息づかいを見ながら、語尾をはっきり話す」とよい。「表情がわかるように正面を向き、耳元ではふつうの声などを記載。近年の聴覚と認知症との関連についても記述されている。	3ページ (52行)
16	看護	NURSING GRAPHICUS	老年看護学① 高齢者の健康と障害 第7版	編者：堀内 ふさ、 諏訪 さゆり、山本 恵子	2024	MCメディアカ出版	① 1 高齢者の理解 5 加齢に伴う変化 ② 4 高齢者の理解とコミュニケーション ③ 5 高齢者看護の基本 5 高齢者によく みられる疾患 9 皮膚・感覚器系 ④ 6 生活を支える看護 1 コミュニケー ション	① 75 ② 244-202 ③ 306-308	①老人性聴覚の特徴を踏まえ「はっきり話し」「ゆっくり話す」「自然な声の大きさ」について、認知機能低下の可能性を考慮し「文章は短く、単語は平易に」「わからないときは言い換え」「わからないうちは書く」などコミュニケーションについて記載。 ②感音聴覚と伝音聴覚について7行程度で説明。 ③聴覚機能の補綴ポイントを表にまとめ提示、感覚機能のアセスメント支援。 *専門医の受診を勧めることが表記されているが、補聴器の記述は少ない。	①16行 ②8行 ③34行
17	看護	NURSING GRAPHICUS	老年看護学② 高齢者看護の実践 第7版	編者：堀内 ふさ、 諏訪 さゆり、山本 恵子	2023	MCメディアカ出版	1-4 高齢者の生活を支える看護 活 動と休息を整える看護	120-123	「高齢者の聴覚障害の事象と特徴」について、感音性聴覚および語音の聞き取りや子音の置き換え、WHOの聴覚の程度を紹介し「聴覚障害のある高齢者とのコミュニケーション」について5つのポイントを解説。補聴器使用時は低音で話すように説明している。 「補聴器の使用」については、購入前に耳鼻科専門医を受診すること、特に初めに補聴器を使うことについても詳細に解説。 補聴器は高齢者のステイタグマともつながること、人に知られたくないなどの心理を記載。	3ページ (72行)
18	看護	新体系 学全書	老年看護学① 老年看護学概論／老 年保健	編者 亀井 智子	2020	メヂカルフレンド社	第1章 高齢者の理解 III 高齢者の身体 の特徴 C 身体機能の加齢変化と日常生活 への影響	13-14	感覚系の機能の変化として、「聴力：高音域から中音域の聴力低下、語音の弁別機能の低下」を説明。 疾患・外観上の変化・日常生活の変化として、「日常会話の聞き取り障害」「音声として聞こえなくても言葉の意味の理解が困難」であることを解説。	2行程度
19	看護	新体系 学全書	老年看護学② 聴覚障害をもつ高齢 者の看護	編者 亀井 智子	2020	メヂカルフレンド社	第4章 高齢者特有の疾患と看護 X 感 覚器疾患と看護 E 聴覚	269-272	伝音聴覚と感音聴覚、検査・診断・治療の特に検査は分かりやすく、アセスメントの視点、目標と看護の中でコミュニケーションと補聴器、代替の活用について概略を述べている。 聞き取りやすい環境の中で、日常生活における危険回避について、「ゆっくりと低い声で、短い文章で話す」「表情や口唇の動きが見やすい状況(対面で、部屋を明るくして)話すことを説明している。	75行
20	看護	学習参考書 根拠がわかる シリーズ	看護実践のための根 拠がわかる老年看護 学技術	編者 泉 キヨ子、 小山 幸子	2022	メヂカルフレンド社	①第II章 老年看護のための基本技術 I 老年看護に必要なアセスメント技術 系 統 別 ア セ ス メ ン ト 8) 感 覚 器 系 機 能 ②第II章 2 老年看護に必要なコミュニ ケー シ ョ ン 技 術	① 35-36 ② 50-59	①外耳・中耳・内耳の加齢変化が記載され、老人性聴覚の特徴、アセスメントの実際のための問診・視診について解説し、年齢別平均フォージオグラムの図を提示しているが、図の説明は少ない。 ②加齢による聴覚機能の特徴は感音聴覚、伝音聴覚や聞こえ方の特徴について説明している。 コミュニケーションのアセスメントとして聴覚機能の確認方法(ささやきテスト・指こすり検査・指タツツ(横笛)を図も用いて説明している。 コミュニケーションのポイントとして、声は高くない音域とすコミュニケーションを出そうとして甲高い声になると聞き取りにくくなることを触れている。助聴器(もしもしフォン)を写真つきで紹介。	①19行 ②半ページ 40行、図表

No.	資格	分類	本のタイトル	編者	出版年	出版社	章	ページ	記述量
21	看護	看護学テキスト	老年看護学概論「老いを生きる」を支えることとは 改訂第4版	編集 正木 治 恵 真田 弘美	2023	南江堂	第1章 老年看護学を理解するための基礎 4 加齢と健康	20-21	「表1.4.1 身体機能の加齢変化と日常生活に支障をきたす状態」の感音系の変化として、蝸牛の変化を説明。日常生活に支障をきたす状態については、高音性難聴と聴き取りにくさの説明。 ①高齢者のコミュニケーションに影響する要因として感音器の変化について、老人性難聴について4行で説明、高音域や言葉の識別力の低下、言葉の識別、高音域の聴力低下、小さい音声、摩擦音が聞きにくいことを説明。 ②聴覚障害の病態と生理学的特徴について、生活への影響については補聴器との各感音器と合わせて説明されている。また本人は自覚しにくく、受診行動が遅れることについても言及している。 対処の方法に対話支援機器（コミュニケーション）を紹介し超高齢社会における環境づくり、予防として聴覚のフィジカルアセスメント（ささやき、指さすり含む）、老人性難聴への介入として補聴器・補聴器を使用する高齢者の心理や使用のための家族や周囲の支援、補聴器使用時のリハビリテーション、安全に配慮した環境支援を19行、事例を挙げて6ページに渡り説明している。 ③加齢に伴う難聴と視力障害によりコミュニケーションが難しくなることと理解していないと思われ、看護職の見方によっては本来の姿を見失い、高齢者の能力を低く見積もるリスクについて言及。 ④伝音性難聴と特に感音性難聴、老人性難聴の語音弁別能、周波数選択性の低下、時間分解能の低下と生活への影響を説明。声をかけて意識を向けられてから、ゆっくりと明瞭に話す。感音性難聴では、補充減少を考慮し、大きすぎない（普通の会話の声の大きさ：60dB）低めの声で話すように心がける。 ⑤認知症看護において、加齢に伴う身体的特徴に配慮したコミュニケーションの方法の中で、聴力低下がある場合の環境配慮や話し方として、声の高さは低く、落ち着いた声でゆっくりと滑舌よく明瞭に話すこと、書き言葉の活用などコミュニケーション方法を説明している。
22	看護	看護学テキスト	老年看護学技術 最新までその人らしく生きることを支援する 改訂第4版	編集 正木 治 恵 真田 弘美	2023	南江堂	①第3章 高齢者の生活と看護—加齢変化とフィジカルアセスメントの技術 9 コミュニケーション ②第4章 高齢者に特徴的な症状と看護—老年症候群 2 感覚機能障害	①127 ②166-179	
23	看護	教科書 専門分野	最新 老年看護学 第4版	監修：水谷 信子、 水野 敏子、高山 成子 編集および執筆：三 重野 英子、曾田 信子、深堀 浩樹	2022	日本看護協会出版会	①第3章 老年看護の倫理的課題と対応 A 高齢者の権利と看護倫理 ②第4章 健康アセスメントに基づく加齢変化と生活支援 B 身体機能・構造の加齢変化と生活への影響 ③第7章 認知症高齢者の看護 D 認知症高齢者とのコミュニケーション	①69 ②112-113 ③328-329	
24	看護	NURSING TEXTBOOK SERIES	老年看護学—健康生活を支える高齢者理解と看護援助 第3版	編者 太田 喜久子	2023	医書薬出版株式会社	第4章 高齢者の健康生活状態の特徴、その変化と看護援助 第7節話す・聞く	151-156	聴力の低下について、伝音性難聴と特に感音性難聴の兆候、図にて加齢に伴う聴力の変化、全般的なコミュニケーション変化と高齢者自身へのアプローチとして、話し方（ゆっくりと話してもらう、上体を起こし相関眼を下げる体位、唇振を促す）について、相手の会話の特徴を知っている人がいれば、聞き返しの負担がなくなることの説明。 負担がなくなることの説明。 聞こえる機能変化への援助、コミュニケーション方法の一つとして伝音性難聴の場合の補聴器の使用について説明しているが、具体的な機器の説明はない。補聴器使用者の気持ちに留意しながら、聴力検査や補聴器試用を勧めめる。

看護師の11冊のテキストに共通し掲載されていたのは、聴覚機能と難聴の分類、聴力の加齢変化、難聴などのある高齢者とのコミュニケーションについてであったが、特に補聴器に関する説明は各社によってその分量は異なっていた。

医学書院『老年看護学① 老年看護学』では、聴覚機能の変化と検査方法およびアセスメントについて、聴力の生理的変化の図、難聴の程度分類の表、2頁(36行)で紹介している。また、「高齢者におこりやすいコミュニケーション障害のアセスメント」について13行で説明している。「難聴や視力障害をもつ高齢者とのコミュニケーションの方法」では33行、「視覚聴覚二重障害の高齢者への対応」について19行で解説している。

医学書院『老年看護学② 老年看護 病態・疾患論』では、第4章では、感覚機能の構造図と難聴の分類の図と難聴の治療や看護上の注意点を3頁(52行)で説明している。

MCメディカ出版『NURSING GRAPHICUS 老年看護学①高齢者の健康と障害』では3章に分け、高齢者の理解とコミュニケーション16行、高齢者によくみられる疾患の皮膚・感覚器系8行、生活を支える看護のコミュニケーションのセルフケア支援について、高齢者自身へのアプローチとして、「自ら難聴であることを伝え、理解してもらえようような行動をとることを促す」ことについても含め34行で説明している。

MCメディカ出版『NURSING GRAPHICUS 老年看護学②高齢者看護の実践』では、3頁(72行)で解説している。難聴の分類や程度、コミュニケーションは32行、補聴器の種類と使用について補聴器になれるまでの各段階は41行を割り当て、図表も用い述べている。

メヂカルフレンド社『老年看護学①老年看護学概論／老年保健』では、表1-7臓器・器官別の主な加齢変化の表中、感覚器系の機能の変化として、「聴力：高音域から中音域の聴力低下、語音の弁別機能の低下」を1行程度、疾患・外観上の変化・日常生活の変化として、「日常会話の聞き取り障害」「音声として聞こえても言葉の意味の理解が困難」であることを1行程度解説している。

メヂカルフレンド社『老年看護学②健康障害をもつ高齢者の看護』では、伝音難聴と感音難聴、検査・診断・治療、アセスメントの視点、目標と看護の中でコミュニケーション補聴器・代替の活用について、75行で解説している。

メヂカルフレンド社『看護実践のための根拠がわかる老年看護技術』では、老年看護に必要なアセスメント技術として、聴覚の加齢変化、老人性難聴の特徴、アセスメントの実際のための問診・視診について年齢別平均オージオグラムの図を提示し19行で解説、コミュニケーションのアセスメントとして聴覚機能の確認方法(ささやきテスト・指こすり検査・指タップ検査)を約半頁で図表を用い説明している。また、加齢による聴覚機能の特徴を16行、コミュニケーションのポイント助聴器(もしもしフォン)を写真つきで24行で解説している。

南江堂『老年看護学概論「老いを生きる」を支えることとは』では、表I-4-1身体機能の加齢変化と日常生活に支障をきたす状態として、感覚器系の身体機能の老性変化として、蝸牛の変化などを1行程度で説明、日常生活に支障をきたす状態については、高音性難聴と聴き

取りにくさについて1行で説明している。

南江堂『老年看護学技術 最後までその人らしく生きることを支援する』では、高齢者のコミュニケーションに影響する要因として感覚器の変化と聞こえ方について4行、聴覚障害の病態と生理学的特徴の中で、生活への影響について7行、対処の方法について25行で解説している。また、予防の視点、聴覚のフィジカルアセスメント（ささやきテスト、指こすり検査含む）、老人性難聴への介入として補聴器・補聴器装用する高齢者の心理や使用のための家族や周囲の支援、補聴器使用時のリハビリテーションについて99行、安全に配慮した環境支援を19行、事例を挙げて計6頁に渡り解説している。

日本看護協会出版会『最新 老年看護学』では、加齢に伴う難聴や視力障害によりコミュニケーションが難しくなると理解していないと思われ、看護職の見方によっては本来の姿を見失い、高齢者の能力を低く見積もるリスクについて5行で解説している。また、機能・構造の変化と生活への影響について2頁（47行）、加齢に伴う身体的特徴に配慮したコミュニケーションの方法の中で聴力低下と認知症への配慮も含め、17行でコミュニケーションについて解説している。

医歯薬出版株式会社『老年看護学—健康生活を支える高齢者理解と看護援助』では、聴力の低下について、伝音性難聴と特に感音性難聴の兆候、図にて加齢に伴う聴力の変化、全般的なコミュニケーション変化について、26行で解説している。また、補聴器の使用については10行で説明している。高齢者自身へのコミュニケーションに関するアプローチとして、義歯の使用、ゆっくり話してもらうことを勧めるなどについても紹介している。

3.3 考察

各国家資格の出題範囲と教科書の分析結果を比較すると、教科書は出題範囲を網羅した内容になっていたことが確認できた。聞こえの仕組みや難聴の種類については、分量に多少の違いはあったが、いずれの資格においても共通して含まれていた。人体や発達の理解という点では、資格の種類にかかわらず、共通に理解しておくべき項目であると考えられる。

一方、難聴高齢者とのコミュニケーションや必要な環境構成、補聴器の取り扱いなどについては、難聴高齢者の生活支援やケアを行う介護福祉士や看護師の教科書のみに含まれており、理学療法士や社会福祉士等には、このような内容は含まれていなかった。つまり、介護福祉士や看護師以外の資格では、難聴高齢者とのコミュニケーションに関する学習は、資格に必須の内容ではないことが明らかになった。

しかし、理学療法士や社会福祉士を目指す学生でも、難聴の高齢利用者たちと接する機会があり、実習場面において看護学生たちと同様のコミュニケーションの戸惑いや困難感（清水，2007；中本ら，2015）を感じるであろう。藤澤ら（2017）が指摘している通り、実習生は教員たちが想像する以上に、実習に対しストレスを感じているため、事前に学ぶ機会があることが望ましい。各資格とも、限られた授業時間の中で出題範囲に含まれていることを網羅する必要

があり、教科書にない内容を授業内に含めることは困難であり、それは各大学の担当教員の専門性と裁量に任されていると考えられる。教員の負担を増やさず、学生たちの事前の学びを促進する方法を検討していきたい。

また、介護・看護系のテキストでは援助者が高齢者本人にどのようにかかわるかといった、援助者によるコミュニケーション等の対応方法についての記述が多かった。しかし、難聴高齢者の対応力向上を目指した高齢者本人と家族へのアプローチについては記述が少なかった。高齢者が受動的なコミュニケーションだけでなく、自発的なコミュニケーションを可能にし、QOLの向上に繋げるため、また難聴高齢者と家族とのコミュニケーションを円滑にするためにも、難聴高齢者やその家族に対するアプローチについて今後、検討を行いたい。

本研究では、出題範囲と教科書からの分析を行ったが、実際の教育ではどのようなことが行われているかは、今後の課題として残された。また、聴覚障害に直接的に関わる言語聴覚士養成における出題基準とテキスト内容の分析と他の専門職教育のテキスト内容の差異についても、今後の検討課題である。

【謝辞】

本研究は、科研研究費（23K10216）の助成を受け行われたものである。

【参考文献】

- 藤澤美穂・畠山秀樹・氏家真梨子・高橋智幸・松浦誠（2017）「医療系大学の臨床実習における学生のストレス」『岩手医科大学教養教育研究年報』52：55-62.
- 堀内ふき・諏訪さゆり・山本恵子（編）（2024）『NURSING GRAPHICUS 老年看護学②高齢者看護の実践 第7版』MCメディカ出版.
- 池添冬芽（編）（2020）『Crosslink 理学療法学テキスト 高齢者理学療法学』メジカルビュー.
- 一般社団法人ソーシャルワーク教育学校連盟（編）（2021）『社会福祉士養成講座／精神保健福祉士養成講座共通科目 医学概論』中央法規.
- 一般社団法人ソーシャルワーク教育学校連盟（編）（2021）『社会福祉士養成講座／精神保健福祉士養成講座共通科目 障害者福祉』中央法規.
- 一般社団法人ソーシャルワーク教育学校連盟（編）（2021）『社会福祉士養成講座専門科目 高齢者福祉』中央法規.
- 泉キヨ子・小山幸子（編）（2022）『学習参考書 根拠がわかるシリーズ 看護実践のための根拠がわかる老年看護技術』メジカルフレンド社.
- 介護福祉士養成講座編集委員会（編）（2019）『最新 介護福祉士養成講座5 コミュニケーション技術』中央法規.

- 介護福祉士養成講座編集委員会（編）（2019）『最新 介護福祉士養成講座8 生活支援技術Ⅲ』中央法規.
- 介護福祉士養成講座編集委員会（編）（2019）『最新 介護福祉士養成講座11 こころとからだのしくみ』中央法規.
- 介護福祉士養成講座編集委員会（編）（2019）『最新 介護福祉士養成講座12 発達と老化の理解』中央法規.
- 介護福祉士養成講座編集委員会（編）（2019）『最新 介護福祉士養成講座14 障害の理解』中央法規.
- 亀井智子（編）（2020）『新体系 看護学全書 老年看護学①老年看護学概論／老年保健』メジカルフレンド社.
- 亀井智子（編）（2020）『新体系 看護学全書 老年看護学②健康障害をもつ高齢者の看護』メジカルフレンド社.
- 北川公子ら（著者代表）（2024）『系統別看護学講座専門分野Ⅱ 老年看護学』医学書院.
- 正木治恵・真田弘美（2023）『看護学テキスト 老年看護学概論「老いを生きる」を支えることとは改訂第4版』南江堂.
- 正木治恵・真田弘美（2023）『看護学テキスト 老年看護学技術 最後までその人らしく生きること支援する 改訂第4版』南江堂.
- 水谷信子・水野敏子・高山成子（監）（2022）『教科書 専門分野 最新 老年看護学 第4版』日本看護協会出版会.
- 森田恵子（2018）「高齢難聴患者と看護師とのコミュニケーションの研究」博士論文，桜美林大学.
- 中本明世・伊藤朗子・山本純子・松田藤子・門千歳・横溝志乃（2015）「臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較—基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して—」『千里金蘭大学紀要』12：123-134.
- 奈良勲・鎌倉矩子（監）（2019）『PTOT 標準理学療法学・作業療法学専門基礎分野 生理学 第5版』医学書院.
- 奈良勲・鎌倉矩子（監）（2020）『PTOT 標準理学療法学・作業療法学専門基礎分野 老年学 第5版』医学書院.
- 太田喜久子（編）（2023）『NURSING TEXTBOOK SERIES 老年看護学—健康生活を支える高齢者理解と看護援助 第3版』医歯薬出版.
- 才藤栄一（監）（2020）『PT・OTのための臨床技能とOSCE コミュニケーションと介助・検査測定編 第2版補訂版』金原出版.
- 佐野智子・勝谷紀子・森田恵子（2020）「全国自治体における高齢者の難聴対策に関する実態調査」第79回日本公衆衛生学会総会，ポスター発表，オンライン開催.
- Sano T., Katsuya N., Osada H., Morita K. (2024) Educational and collaborative model for early detection and intervention of age-related hearing loss to enhance health and well-being of the aged, Gerontology as an interdisciplinary science, 191-213, Springer.

- 清水裕子（2007）「看護学生の老年者との対話の問題と特徴」『老年看護学』11(2)：56-63.
- 総務省統計局（2024）「統計トピックスNo.142 統計からみた我が国の高齢者 ―「敬老の日」にちなんで―」https://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/topi142_summary.pdf 2024年10月28日閲覧.
- 高野幸子（2024）「臨地実習で看護学生が患者とのコミュニケーションで感じる困難に関する文献レビュー」『順天堂保健看護研究』12：2-11.
- 鳥羽研二ら（2018）『系統別看護学講座専門分野Ⅱ 老年看護 病態・疾患論 第5版』医学書院.
- 鶴見隆正・隆島研吾（編）（2021）『PT標準理学療法学専門分野 日常生活活動学・生活環境学 第6版』医学書院.
- 内田育恵・杉浦彩子・中島務・安藤富士子・下方浩史（2012）「全国高齢難聴者数推計と10年後の年齢別難聴発症率 ―老化に関する長期縦断疫学研究（NILS-LSA）より―」『日本老年医学会雑誌』49：222-227.

Current Status of Education on Age-Related Hearing Loss at Professional Training Schools for Health and Welfare Professions: The Criteria for the National Examinations and Textbooks

Tomoko Sano, Tomoko Ogawa, Keiko Morita, Hisao Osada

Abstract

This study aims to clarify the current education status on age-related hearing loss in health and welfare professional training schools according to each certification's examination criteria and textbooks. The study examined the current state of education on age-related hearing loss and communication with the elderly with hearing loss at training schools. We extracted items related to hearing impairment in old age and communication with the elderly with hearing loss from the national examination standards and textbooks for physical therapists, occupational therapists, social workers, psychiatric social workers, care workers, and nurse certifications. The current status of education on age-related hearing loss and communication with the hearing impaired and hard-of-hearing elderly at training schools was examined. The analysis of the scope of the national examinations and a total of 24 textbooks revealed that the common items for these certifications were the mechanism of hearing and types of hearing loss. On the other hand, items related to communication with the elderly with hearing loss were included for care workers and nurses who assist and care for the elderly, but not for the other qualifications. The results from the textbooks were consistent with the question criteria, confirming that the textbooks reflected the scope of the questions well. However, it remains to be seen how the actual education was provided in practice. This issue is of paramount importance and requires immediate attention.

Keywords: age-related hearing loss, communication, health-and welfare professionals, textbooks, criteria for the national examination

